

はしがき

小学校教師をしていた私は、一九八五年三月三十一日付けで定年退職となり、それから三年と二か月の歳月が経ちました。子どもと共に過ごした時間が長かった故か、そばに子どもの声のない生活が妙にさびしく、手持ち無沙汰に感じられました。

ちょうどそんな折、何人かのお母さん方のお勧めもあり、一九八六年三月から「人間塾」という塾を始めました。

「今の学校は毎日が息がつまりそうで自由に呼吸ができない感じだ」

こうした声を子どもからも教師からも聞きます。子どもを管理と統制のなかに押さえ込もうとする力が強められることと平行して、学校が息のつまるようになっていっているとも言われています。

息がつまりそうでも、自由に呼吸ができない感じでも、それでも子どもは毎日学校に行く、いや、行かなければならないのです。

塾を創るなら、まず子どもが安心して自由に息の出来る空間を創りたいと考えました。場所ではないのです。場所という考えを持つと、私自身が息のできる特定な所と

いうように限定してしまいそうな恐れを持ったのです。

言葉は概念を規定します。場所だと広がりを持たずに私自身の考えも、だんだん狭まっていきそうな気がしたのです。ですからあくまでも自由な場所ではなく、自由な空間でなければならぬと考えました。そしてのびのびと呼吸をするなから、人間が生きていくうえで最も基本的な、「食」と「衣」と「住」の問題を根源的なところから、しかもいろんな角度で子どもと一緒に勉強していこうと考え、それを元にして、「生き抜く力」と「やさしさ」と「かしこさ」をしっかり身に付けた子どもを育てたい、そんな希い^{ねがひ}をこめて「人間塾・徑集館」を創りました。そして満二年が経ちました。

人間塾の子どもたちは特にいい子ども、出来た子でもありません。極く一般的などこにでもいる普通の子どもたちです。でもその二年の間に私が学んだことは、特別に優れた技術や立派な教材や教科書はいらないということでした。教材も教科書もすべて子どもの日常の生活のなかにあるということでした。

そして優れた技術がなくとも、自由な空間で子どもと一緒に呼吸していれば、すべて子どもが引き出してくれるということでした。そしてさらに大切な事は、安心して自由に息のできる空間がありさえすれば、子どもは自分の持っている可能性を自分の